

パソコンで相手チームを分析 選手に適切なアドバイス



信頼関係を大切に

グラフや図など駆使し国際大会経験生かす

学長賞受賞のバレーボール部アナリスト 渡辺 啓太くん

▲パソコンで相手戦力を分析する

試合を見ながら、パソコンを片手に相手チームを分析し、自軍の選手にアドバイスを送る。バレーボール部でアナリストを務める渡辺啓太くん(ネット情報3・浅野高)は、チームが勝つ上で重要な役割を担っている。アナリストとは、ビデオやパソコンを駆使し、相手や自チームを調査・分析する専門家を指す。

「自分にしか出来ないことでチームの力になりたい」、そう考え始めていた時、アナリストという仕事を知った。初めは「まずは興味を持ってもらおうと、積極的に自分から情報を選手に伝えた」。その甲斐あって、次第に選手の方から聞きにくるようになっていった。最も大切なのは互いの信頼関係。「信頼関係がなければ自分の仕事は成り立たない。そのために徹夜で分析することもある。だけどその中で実際に役立つのはほんの少し」と言って苦笑する。

全日本女子チームに帯同

今年7月には、女子ワールドグランプリを戦う全日本女子チームのアナリストとして帯同。女子チームは初めてなので「普段以上にグラフや図など、視覚的に理解しやすい情報表現を心がけた」と言う。「国を代表するチームのスタッフとして重圧や責任感を感じたが、一つひとつの作業に全力で取り組み、貴重な体験が出来た。特に監督を中心としたスタッフや選手が各々の役割に徹し、戦う姿勢に刺激を受けた。自分の仕事に対する意識がより高まった」。大会後には、大学からも活躍を評価され、学長賞を受賞。また、全日本チームに帯同したことで「次の北京オリンピックで、全日本チームのアナリストとして金メダル獲得に貢献する」という、新たな目標も出来た。

「自分の分析した情報を選手が信用し、試合で役に立ち、感謝された時が一番うれしい」と話す。チームの1部優勝、そして自身の目標に向かって、これからも邁進して行ってほしい。

(木村 太一・法1)

【ニュース専修2004年10月号14面】

ランク上げグランドスラム予選出場の チャンスねらう

道慶 知子さん(プロテニス選手 平16経済=ミズノ所属)



在学中に全日本室内選手権などのタイトルを獲得、卒業時に川島 記念体育賞を受賞し、プロテニス選手となったOG・道慶知子さん(平16経済=ミズノ所属)から近況報告が届いた。

練習と試合の繰り返しで、生活は学生時代とほとんど変わっていませんが、周囲の目がテニスを仕事としている『プロ』なんだから、と厳しくなったことは自覚しています。今、世界ランキングは360位前後ですので(9月末現在)、グランドスラム大会(全豪・全仏・全英・全米)の予選大会に出られるよう、少しでも順位を上げることが当面の目標です。

主な試合 結果は、山口国際大会(4月)シングルス・ベスト4、軽井沢国際(5月)同 ベスト8、Baltimore,MD,USA(7月)で準優勝といったところです。6~7月はアメリカ・カナダを転戦しましたが、予算の関係でコーチやマネージャーをつけることができず、格安エアチケットや宿舎の手配そして試合とすべて自分でやらなければならないので大変でしたが、やり通してきました。英語でのコミュニケーションは、国際 経済学科で学んだことが役立っています。

海外のプロツアーでは予定通り、事が進まないのが常識です。試合の開始時間が急に変更され、観客など誰もいない真夜中にプレーすることもあります。また、雨で試合が延びれば、すべてのスケジュールが突然変わってきますので、臨機応変に対応していかなければなりません。在学時代、女子テニス部監督の佐藤雅幸先生は「プロツアーはサバイバルゲームだ！」とおっしゃっていました。プロの世界で生き残っていくためには、プレーはもちろんのこと、体力も精神力も本当の意味でタフでなければならないということを実感しています。

試合のない時期は実家のある大阪で、練習させていただいているテニスクラブのジュニアの練習を手伝ったりして気分転換をしています。8月には、女子テニス部の夏合宿で、久しぶりに後輩たちの笑顔に会えました。

10月に静岡、11月に山梨での試合に出場し、12月のイザワクリスマスオープンにもエントリーする予定です。スポンサーや、物心両面から支えてくれている両親はもちろん、応援してくださっている皆さんに、結果でご恩返しができるよう、頑張ります。

【ニュース専修2004年10月号14面】

格闘王国・専大と日本女子レスリングとの縁

—特別寄稿— 専大スポーツOB 東京中日スポーツ契約記者

木村 啓司(平13法)

2004年夏。強く、可憐な大和なでしこが、オリンピック発祥の地に咲き誇った。1928年アムステルダム大会から参加している日本女子が今大会、初めて男子の数を上回った。東京大会に並び最多となった16個の金メダルも、男子の7に対し女子が9個。「女性の五輪」を際立たせたのは今回から採用された女子レスリングだ。日本は全4階級でメダルを獲得し、55^{kg}級・吉田沙保里、63^{kg}級・伊調馨が「初代女王」として名を刻んだ。今大会の勝者のみ得られる名誉の重みは「アテネだからこそ金を獲りたかった」という48^{kg}級で銀だった、馨の姉・千春のひと言が証明している。伊調姉妹と吉田が中京女子大のチームメートで、ともにルーツが青森県にある事は繰り返し報じられた。もうひとつの共通項があることを専大生の皆さんはご存じだろうか。

伊調姉妹を小学校入学前から指導してきたのは、八戸市で少年クラブを主宰する澤内和興(昭44商)。三重県の自宅兼道場で、娘を徹底的に鍛えたのは、吉田の父・栄勝(11面『校友を訪ねて』参照)。ともに専大レスリング部OBである。さらに、伊調姉妹の兄・寿行(平12経)は同部の第56代主将だ。中女トリオのメダル物語は専大レスリング部が深くかかわっていたのだ。もし専大に女子部があったら、間違いなく専大の名が世界に打電されていただろう。

創部70周年を迎えた同部は、68年メキシコ大会で金子正明(昭38商)がフリー・フェザー級を制して以来、延べ10人が五輪に出場し、金2個、銅1個を持ち帰ってきた名門だ。プロレスの長州力、馳浩(現監督)、中西学、秋山準らの出身校としても知られている。92年バルセロナに出場した中西以降、同部は五輪から遠ざかっているが、4年後の北京は大いに期待できる。最有力が61代目の主将、田中章仁(経済4・三井高)だ。体重100^{kg}。そこそこながら1年次から天皇杯全日本選手権の最重量級を制しており、今年(12月21～23日、代々木第2)は4連覇がかかっている。アテネはフリー120^{kg}級での出場を狙ったが、切符を取り損ねた。プロ格闘界から熱視線を浴びる男は、北京を目指している。

全日本学生王座決定戦と、女子ワールドカップが10月7日から9日まで相次いで駒沢で行われた。専大は初戦敗退、全日本女子は優勝。『格闘王国・専大』のDNAを受け継ぐ両者は明暗を分けた。学生王座の5日前、生田道場をのぞくと「団体で、専大として勝ちたい」と田中主将が語っていた。
11月の内閣総理大臣杯全日本大学選手権でリベンジしてほしい。
(文中敬称略)

【ニュース専修2004年10月号14面】

レスリング部70周年を祝う



日本レスリング史上に残る多くの名選手を輩出してきたレスリング部の創部70周年を祝う記念祝賀会が9月25日、神田キャンパス「報恩の間」で行われた＝写真。

出牛正芳理事長、日高義博学長、木幡文徳部長をはじめ歴代部長、コーチ、卒業生、現役部員ら約90人が出席。旧交を温め、思い出話に花を咲かせていた。これまでの苦労をねぎらい、更なる発展を祈念し、散会した。

【ニュース専修2004年10月号2面】